石川三四郎の教育思想

―「人格の独立」に着目して―

The Educational Thought of Ishikawa Sanshiro

Focusing on "independence of individual-identity"

明星大学大学院教育学研究科教育学専攻

博士後期課程　17DK－001　貞清　裕介

１．本研究の目的と問題の所在

石川三四郎（1876-1956）は、明治、大正、昭和前期に社会運動家として活動した、日本の学校教育で語られることが少ない「忘れられた思想家」である。石川が「忘れられた思想家」として評価される要因として、同時代に活躍した武力的な社会運動を展開し人生の最後が劇的であった幸徳秋水（1871-1911）や大杉栄（1885-1923）らと比較して、石川の社会活動が地道でかつ、人間の理性に訴える啓蒙活動に従事していたため注目を浴びなかったことが挙げられる。しかし、啓蒙活動に力点をおいた石川の社会運動や論考は、混迷する日本社会や日本人にとって、人間としての生き方や人格のあり方、社会のあるべき姿を示し、また、ジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau,1712-1778）の社会思想を押さえた広義の教育的な活動であったとも評価することができる。そこで、本研究の目的は石川の生涯とその思想形成、社会活動や著作物、教育的な活動を通して教育思想を明らかにすることである。

石川の教育に関する研究において、二つの課題が指摘できる。第一に、石川の教育に関する研究が、1904（明治 37）「小学教師に告ぐ」のみを取り上げて論じられている事が多い点である。第二に、石川をキリスト教社会主義者や無政府主義者として一面的に解釈された研究が多いことである。

第一に、石川の教育に関する研究の課題について取り上げる。近年、教育学における石川の研究としては、小田義隆の「明治社会主義者石川三四郎と教師のしごと」（2021 年）が挙げられる。それ以外の教育学研究において、石川の「小学教師に告ぐ」を中心に扱った研究は、坂本忠芳・柿沼肇編『社会運動と教育』（1974 年）、寺崎昌男・前田一男編『日本の教師 22　歴史の中の教師 1』（1993 年）、土屋基規『近代日本教育労働運動史研究』

（1995 年）が挙げられる。これらの研究は、石川の「小学教師に告ぐ」を中心に検討し、明治期の社会主義者として社会主義運動の一環としての活動的な意義を認め、その上で当時の教師像の分析や影響について論じている。それに対し、小田の研究では、「小学教師に告ぐ」以外の石川の資料も検討しており、石川の活動によって教師の権利の獲得と発展を実現する「教職員組合」の潜在的な思想を根付かせたと評価している。以上のように、教育学研究の分野で絞ると「小学教師に告ぐ」のみを取り上げたものが多く、2021 年の小田の研究によってそれ以外の論考も扱われるようになったという状況である。

他方で、石川の「小学教師に告ぐ」以外に教育的な活動の価値に言及した研究としては、ユートピア研究の一環として石川を取り上げた西山拓『共同社会の構築と教育　包括的教育学の試み』(2011 年)、社会臨床研究の一環として石川を取り上げた飯島勤「自学の系譜（1）石川三四郎の教育志操:『小学教師に告ぐ』をめぐって」(2012 年）が挙げられる。この二本の研究では、石川は生涯において教育を重視していた活動を展開していたと指摘している。しかし、西山の研究においては、ユートピア研究の一環で石川を扱い、教育に関する記述は主題となっていない。また、飯島の研究は、石川の教育思想については自己教育という結論を出している一方で、石川の思想形成や当時の時代背景や教育の実際からは論じられていない点がある。いずれにせよ、石川の教育に関する研究としては、「小学教師に告ぐ」以外の論考や社会活動も押さえて論究する必要がある。

第二に、石川を社会主義者（初期社会主義、キリスト教社会主義を含む）の立場として、又は無政府主義者の立場として、一面的な解釈をした教育学研究や石川研究が見られる課題について取り上げる。先の教育学研究においても、「明治期の社会主義者として社会主義運動」と論じられている傾向が強い。そこには、石川の一人の思想家としての評価が反映されていない問題点があるように思われる。石川をキリスト教社会主義者や無政府主義者として評価する研究が多い要因として、石川の著作物は膨大であり、時代ごとに主義や主張が異なるため、研究上の困難さが推察される。この困難さの背景となる石川の生涯について簡潔にまとめると以下のような特徴が挙げられる。

石川は、1913（大正２）年に日本で起きた大逆事件に端を発する社会主義者弾圧などの影響から、ヨーロッパとアフリカに亡命することになる。亡命以前の石川にはキリスト教社会主義的な立場をとった論考や発言が多くみられたが、1920（大正９）年にヨーロッパとアフリカから帰国した後には「土民生活（デモクラシー)」思想に基づく無政府主義的な立場をとるような論考が多く見受けられるようになる。一方で、帰国の 1 年前である

1919（大正 8）年から石川は古事記の神話に関する研究を始めて、1935（昭和 10）年以降から本格的に東洋史の研究に専念することになる。この石川の東洋史研究の内容は 1930 年代以降の出版物から読み取れる。

このように、石川は時代が進むごとに主義、主張や研究する内容の傾向が変わっていることから、石川研究の特徴として、石川の一生涯を扱う研究は少なく、石川の一時代、限定的な立場を扱う研究が多くみられる。しかし、石川の思想家としての活動は多岐にわたり、彼の思想の本質を押さえるには一生涯を追っていく必要があるように考えられる。そもそも、石川の魅力とは、鶴見俊輔が述べるように「日本の知識人の世界における右翼と左翼とは、日本の国家権力追随の文化人と海外の国家権力追随の文化人というわくぐみの外に出る」[1]者と評価できる点にある。この観点から見て、先行研究において石川の一生涯を追った数少ない研究として、西山の研究が挙げられる。西山の研究手法は石川の生涯を追って、石川のユートピア的な社会運動論の意義を示している。本研究は、鶴見の評価を踏まえ、石川を論じる上では、キリスト教社会主義者や無政府主義者の枠組みに囚われて論じるのではなく、西山研究の手法のように石川という人物の一生涯に焦点を当てていく必要性がある。

2. 本論文の概要と結論

石川の教育思想の核として「人格の独立」が挙げられる。石川は社会と個人の関係を考察し、民主主義の社会を構築する上では、社会的協同と個人的自治の重要性を考えていた。石川は特に、個人的自治を重んじ、その個人的自治を果たすためには「人格の独立」が必要であると論じていた。石川の「人格の独立」は、論考によって「自我の自治」や「自性」という表現が変わることもあったが、その内容は個人的自治を果たすという点で一貫していた。石川は、「人格の独立」を果たすために、個人の「内省」を求めた。そして、個人の「内省」をするために、個人が生活を自治し、自由と道徳的責任を享受し自覚する必要があると石川は考えた。以下からキリスト教社会主義期、「土民生活」思想期、東洋史研究・戦後社会運動期の三期で明らかになった内容をまとめる。

キリスト教社会主義期に石川が教育について論じた「小学教師に告ぐ」では、当時の教師の職務が、権力社会に組み込まれる教育になっている点を見抜き、教師、児童たちにとって本来行われるべき教育ではない点を言及していた。これらを踏まえて、キリスト教社会主義期の石川の教育思想として、教育は国家主義に組み込むための「機械化された教育」

ではなく、子供という個人に教育を施すことの重要性を示した。ただし、「小学教師に告ぐ」を発表した時点の石川は、「人格の独立」という視点に至って論じてはいない。しかし、石川は教育者が本来の行わなければいけない職務を把握していない実態、つまり、教育者自身が教育の自治を行っていない点を指摘していたとも読み取れる。石川の「小学教師に告ぐ」は、「人格の独立」の思想の兆しを示した論考であったとも言える。

「土民生活」思想期の石川は、「土」に根差した実生活に適した教育を施し、「人格の独立」を芽生えさせることの重要性を説いた。この時期の石川は、日本人の気質として、西洋の「模倣」をしているのであって、「摂取」に至っていないと指摘している。石川は、「模倣」の一例として、「自由教育」による西洋風の教授法を挙げた。石川は自主の精神の差によって「模倣」と「摂取」は異なるとして、「模倣」するものを耕し、自身の生活を耕すことによって「摂取」になる。石川は、自主の批判をするためには、「内省」によって「人格の独立」を果たすことを求めた。

石川は、「土民生活」思想に基づいて、「自然」による教育を重視している。石川によると、自然は教育者であるとともに無尽蔵の図書館として、自然の持つ芸術的な側面を教育者にして、芸術家にして智識の包蔵者と論じている。石川の自然観は、『エミール』の著者であるルソーの「自然に還れ」の理念を用いて論じている。ルソーの自然観を基に、石川は自然による教育によって、個人の自治が成り立つと論じている。そのため、大正期に行われていた教育について石川は、「自由教育」の声によって建てられた有力な私立小学校を「教育術上の試験所」と指摘した。このような教育は、石川によれば教育方法の「真似事」の教育であるとして、権力構造に組み込む「機械化された教育」であると論じた。

東洋史研究・戦後社会運動期の石川は、「機械化された教育」から脱却することを望んだ。石川は、「忠君愛国」を掲げた教育によって、個人や人格は喪失していき、権力社会に追随する階級思想や昇給主義が見られるようになったと論じた。そのために、石川は個人の尊厳を徐々に喪失した社会と道徳観に対して、個人の人格と生活を重んじる社会運動を展開した。石川の教育観では、教育は生活の一部として、生活改革の側面を重視したものであった。石川の道徳観や教育観はどちらも個人が生活を自治することを重要視した。このことから、石川は「人格の独立」を果たすため伝道と啓蒙を重んじた教育的な社会運動家であった。このような「人格の独立」を果たすために個人の人格の解放と育成、そして憧れを実現しようとする能動的な力は、政府の権力構造や社会主義、共産主義が指導する権力闘争では培われないものであった。

本稿では、問題の所在で示した石川の生涯を三期に分けて論じたことにより、キリスト教社会主義の理念を「土民生活」思想へと深化させていき、「人格の独立」を果たすための個人主義を重視した社会運動を展開したことが明かになった。加えて、社会における個人のあり方、それに対する教育のあり方を模索し考え、「共学社」や「近代学校」など社会教育的な実践的な活動も行い、「人格の独立」を果たすことを追求した人物であった。また、キリスト教社会主義者や無政府主義者の枠組みに囚われずに論じた結果、石川の社会運動の特徴として、指導者となって人々を扇動するのではなく、教育者となって「人格の独立」を芽生えさせるために被教育者とともに伝道と生活をし、人情を啓発する性質を持っていたことが明かになった。

石川の社会教育的な実践活動や社会運動は理想的な社会像を追求していたため、その社会実践や社会運動は成功せず、未完で現実的な社会運動としては成功し得ない側面をもっていた。しかし、石川は二度の世界大戦が起こる混迷した社会で個人の人格が社会に埋没していき機械化していく社会生活に対して、「人格の独立」という徹底的な個人的自治に根差した社会生活の重要性を、石川自身の生活態度や社会的実践で示そうとしたことが評価できる。

注

---

[1] 鶴見俊輔「解説」鶴見俊輔編『石川三四郎集』近代日本思想体系 16、筑摩書房、1976 年、461 頁。